

# よりよい生き方を探求する力を育む道德の授業

ネット将棋 ～自主、自律へ～

和田 雅博

## 1. 道德における「知」の研究について

『つながり、かさなり、ひろがる授業』という研究テーマにおいて、一昨年度より道德における「知」を『自ら直面する状況において、他者には個々に様々な道德的価値判断が存在することを知り、自らの自覚において経験をもとに判断する力』と定義付けて研究を行ってきた。昨年度までの2年間は、小・中学校で連携し、同じ読み物資料を用いて研究を進め、道德における「知」の構築を目指した授業を提案した。昨年度「知」を鍛えるための授業展開について共同研究を進めていった。その結果、資料の内容を児童・生徒に、他人事としてとらえるさせのではなく、いかにして引き寄せて考えさせることができるのかということが、道德における「知」の構造化を図るために大変重要な鍵になっているということがわかった。今年度は、さらに道德における「知」の評価の観点にも着目して研究をすすめてきた。

## 2. 道德における「知」の評価とは

道德における「知」の評価については、児童・生徒の学習意欲を高める上で、なくてはならないものである。道德の授業は、自分の考えを人から受け入れられることや、人の意見を受け止めて考えることで深まりを見せる。そのため、教師の指導言の一つ一つが、評価として児童・生徒に伝わり、それが児童・生徒一人一人の「知」の獲得を左右しているともいえるのである。

## 3. 道德における「知」を評価する授業展開の工夫

道德における「知」の認識・構造化・活用を評価するための具体的な手立ては以下の通りである。

### (1) 「知」の認識を促す評価活動

児童・生徒は、教師の発問に対して、答えを自分の持っている知識・経験をもとに想像力を働かせて主人公になったつもりで考える。よい発問は、児童・生徒の道德的価値の認識を促すことができる。児童・生徒は、道德的価値に対して「自分は、このようにとらえ、考えているのだ。」と認識し、それを発表する。真剣に考えた上での答えであれば、どのような答えでも受容的に受け止め、肯定的に評価を与える。このような評価活動の繰り返しが、お互いの多様性を認め合える雰囲気づくりにつながると考えられる。

### (2) 「知」の構造化を図る評価活動

児童・生徒は、資料を通してお互いの意見を交流し合う。このような活動を通して、自分と違う様々な見方・考え方があることを知ることができ、より深い道德的価値の自覚、つまり道德における「知」の構造化へとつながっていくと考えられる。

「知」の構造化を図るためには、多様な意見を見やすく整理しながら板書することや、追発問を工夫することで、様々な意見が重なり、さらに視野がひろがっていく。

このような授業活動において注意する点としては、児童・生徒の答えに対する板書や問い返しは、先生がその意見に対してどの程度重要に受け止められたのかを測る物差し、つまり児童・生徒から見ると、評価の一環と受け止められる。教師のイメージするいい答えこそ重要だと児童・生徒に感じさせるのではなく、多様な意見を広く深く受け止め評価として板書や問い返しができるように、発問に対する答えを多数予想しておく必要がある。

## 「知」を鍛える授業展開3つの視点において目指す児童・生徒の姿

自律的で責任のある行動をする。	「知」の認識 本当の自由とは何か。	「知」の構造化 自律的で責任のある行動をとることの意味とは。	「知」の活用 本当の自由な行動をとろうとする意欲を持つ。
小学校	本当の自由と、そうでない自由があることを認識する。	自律的で責任のある行動をとることのよさがわかる。	自律的で責任のある行動をとろうとする。
中学校	自由の意味について考える。	本当の意味での自由な行動とは、自律的で責任のある行動をとることであるとわかる。	自律的で責任のある行動をとろうとする。
具体的な評価方法	授業中の主に発言意欲に対する肯定的評価	授業中の話し合いにおける発言に対しての板書や問い返しによる道徳的な価値を意味づける評価	授業中の感想等に対するコメント等、よりよく生きようとする思いに寄り添った評価

### (3) 「知」の活用の評価について

新たに道徳的価値を自覚することでこれから自分はどうかあるべきか考えていく。そのために、資料等を通して新たに自覚した道徳的価値について感想を書き、それを交流できる場面を設け、よりよく生きたいという願いのもと考えを深めていけるようにする。この「知」の活用についての動が、道徳的心情・道徳的判断力・道徳的实践意欲や態度について、授業前と比べて深まっているかどうかの判断につながると考えられる。

(1), (3) のような評価活動は過去2年間の実践の中でも取り組んできた。中でも今回は、(2)「知」の構造化を図る評価活動に焦点を当て、以下の2点を提案する。

- ① 子供達の価値に対する考え方は一人ひとり違うため、その違いの出る場面で発問し、段階ごとに意見を聞き、共有することで評価し合い、価値の自覚に迫る。
- ② 教師が道徳的価値に対する評価軸を持つ。そうすることで子供達の価値に対する考えに気づき、評価し共有させることができる。

(1) から (3) のように小学校、中学校で共通の手立てを行うことで、それぞれ発達段階に応じた道徳的価値における「知」を獲得できるだけでなく、9年間の学習の連続性の中で鍛えることのできる道徳における「知」を明らかにする。

## 4. 小中9年間の学びの階層性・系統性・連続性

本年度は、内容項目1-(3)「自律」の道徳的価値について、9年間の学習の連続性の中でそれぞれの発達段階で鍛えることのできる道徳における「知」に対する評価について研究していく。現行の学習指導要領には、低学年・中学年の自律の内容項目は示されていない。だが、道徳の教科化に向けた新学習指導要領では、内容項目A-①として、低学年から示されている。内容は、次の通りである。

<小学校>

### A 主として自分自身に関すること

[善悪の判断, 自律, 自由と責任]

第1学年及び第2学年「よいことと悪いことを区別し、よいと思うことを進んで行うこと。」

第3学年及び第4学年「正しいと判断したことは、自信をもって行うこと。」

第5学年及び第6学年「自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。」

<中学校>

### A 主として自分自身に関すること

[自主, 自律, 自由と責任]

自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。今年度は、

「自律」についての道徳的価値を扱った資料を通して、小学6年「大空に飛び立つ鳥」、中学3年「ネット将棋」の資料を用いて授業を行う。

## 5. 単元設定の理由

ここでは、大阪教育大学附属池田中学校3年D組（40名）を対象に授業をした実践を報告する。

道徳の評価をどうするか。そのため短期的なねらいを設定し、それらの積み重ねによって長期的な目標を実現する。平成26年度10月21日に示した中央教育審議会の「道徳に係る教育課程の改善について（答申）」には、道徳教育の評価に関して「道徳教育の充実のためには、目標を踏まえ、指導のねらいや内容に照らして、児童生徒一人一人のよさを伸ばし、道徳性に係る成長を促すための適切な評価を行うことが必要であること。」とある。

また、「中学校学習指導要領解説道徳編」において「道徳性の評価においては、生徒自らが成長を実感し、新たな課題や目標を見つけられるよう、教師が生徒の道徳的な成長を温かく見守り、よりよく生きようとする努力を認め、勇気づける働きを重視する必要がある。」と再説されている。つまり、指導のねらいや内容に照らして生徒の道徳性の育成に有効な学習展開のあり方と一人一人のよさを伸ばし、道徳性に係る成長を促すということである。

そのため、まずは1時間の授業の充実が重要となる。

そこで、短期的なねらいにおいては授業で扱う教材の特質を生かした具体的なねらいを設定した。加えて、生徒たちがわかっていることではなく、概念と概念をつなげることで何らかの新しい学びを想定してねらいを立てた。つまり、1時間の授業をとおして生徒たちに何らかの変化が起こらなければならないという考え方に立ち、起こるべき変化を具体的に表したねらいを立てたのである。さらに、子どもの道徳性の伸びを見とり成長を促すために、授業中での発言や文として表した感じ方や考え方・判断を褒め励ますような評価を考えた。

### ・長期的な目標

自主自律の厳しさと対峙し、自己の真実の面目を貫くための道徳的判断力を培う。常に誠実であり、人間として誇りをもった責任ある行動をとろうとする態度を育てる。

### ・短期的な目標

自分が正しいと信じることに明瞭に意見を述べ、誠実な責任ある行動をとれるようにする。

### ・本時の評価文例

思いつき、独り善がり、独断といった言動は自分も相手も幸せにしないことがわかりました。誠実な言動は自分を成長させ、自信や誇りを生み、他者との共感を得ることに気づきました。

そこで、生徒のよさを伸ばし成長を促すために「ICEモデル」と「コンセプトマップ」を取り入れた。

このICEモデルが有効なのは多面的、多角的に質的なものを評価する点である。生徒が学んだことを結び付けて新しく発展させ、創造的などころまで高めることこそ、本当に身についた学びと言える。さらに、それぞれの生徒が授業でどれだけ前進したのかを授業中であっても本人のスタート時点と比べて評価できるという点である。教師はこれに基づいて、生徒が今どこにいるかにかかわらず、さらに学びを深めることができるようそれぞれに助言と課題を与えることができる。

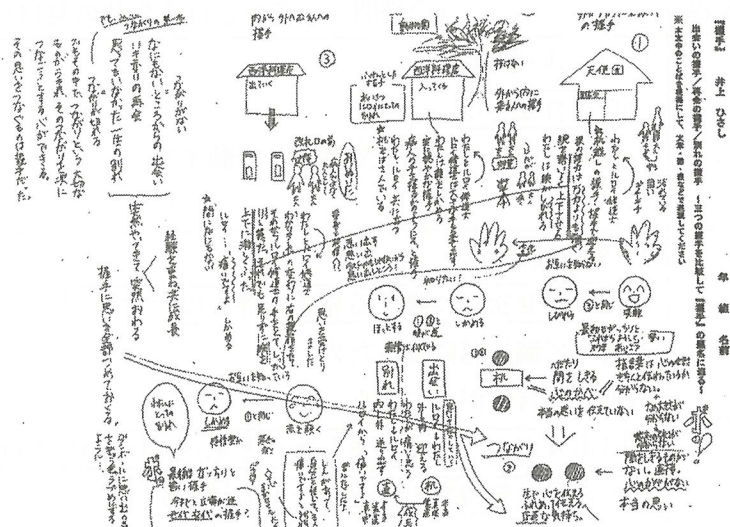
学びの段階として、①アイデア（Idea）、②つながり（Connection）、③応用（Extensions）の三段階がある。

①アイデア (Idea) 「価値認識」	・生徒が「自主自律」の定義について、自分の考える基本的な概念を伝達することができる。
②つながり (Connection) 「自己認識」	・生徒が「自主自律」に対して、自分の考える基本概念と概念の間にある関係やつながりに対して説明することができる。 ・生徒が「自主自律」に対して学んだことと、すでに知っていることの間にある関係やつながりについて説明できる。または、生徒が新しく広げられた価値の世界に対して、自分はどうか考え、どう評価するのかを追求する場面。
③応用 (Extensions) 「自己展望」	・今後、生徒が「自主自律」について新たに学んだことを新しい形で使うとき。または生徒が「将来、このような場面に出会ったとき、どうしようと思うか」というような仮説の質問に答えられる場面。

最初のステップは①アイデア (Idea) である。アイデアとは学習を形作るもので、必要な語彙、ある程度における複数のステップなど、いずれも新しいことを学ぶのには欠かせないものである。本時では、授業前のアンケート結果、板書、教材の初読の感想がこれにあたる。次は②つながり (Connection) である。生徒は教材内の場面においてどんな状況なのかを把握して、どのようにすればよいのか判断する。こうしたつながり (Connection) を発見していく過程は、アイデア同士がどのようにつながっているのが理解し、思考を深めているということである。さらに、③応用 (Extensions) として、つながりが作られるということは学んだこととすでに知っていることの間に関連をつけるということである。このつながりは一層深い学びとなって授業後になっても思い出して使える学びとなる。これは特定の価値観に基づいた結論へと導くような従来型の道徳ではなく、答えが1つではない課題を生徒に投げかけ、生徒自身が考え、議論する授業実践だと考えた。

言語活動については道徳の授業においても、言葉を生かした教育の充実が図られなければならない。そこで、コンセプトマップを活用し、生徒がどのような「過程」を経て学びを進めているのかを可視化することができるようにした。「学習指導要領特別の教科道徳 指導計画の作成と内容の取扱い」には、「国語科では言葉に関わる基本的な能力が培われるが、道徳科は、このような能力を基本に、教材や体験などから感じたことや、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論などにより考え方、感じ方の異なる人の考えに接し、協同的に議論したりする。」とある。加えて、平成16年文化審議会答申「これからの時代に求められる「国語力」について

の構造」にも、国語科の知識として「語彙」「表記」「文法」「内容構成」「表現」などが挙げられている。そこで、第3学年国語科ではコンセプトマップ(概念マップ)を教授・学習・評価ツールとして活用してきた。生徒は教材から得られたアイデアとアイデアを関連付けながら構造化し、主体的に学ぶ学習を展開してきた。また、「探求活動」と「習得と活用」を繰り返すことで、今までには気付かなかった新たな発見を自分のものの見方や考え方につなげることができた。指導事項を螺旋状に積み重ね、その成果



を読書活動へと繋げる試みとした。(右：生徒作品)

本授業では、『ネット将棋』（「私たちの道徳」文部科学省）を資料とし、（新）中学校学習指導要領解説特別の教科 道徳編A-1「自主、自律、自由と責任」に焦点をあてる。人間は社会の複雑な人間関係の中に生きる。それらは個人個人に様々な影響を与え、学習訓練の機会と内容を与えてくれる。それらに影響を受け積極的に学習しながらも、自己はどこまでも自己であって他人ではないという主体性を生き抜かなければ、かけがえのない自己の主体は確保できない。つまり「自分の信ずるところに従って行動する」ためにも、社会や他人から学びながら「自分の考えをはっきり述べる」、「みだりに他人の意見や言動に動かされない」ということが単なる思いつきや独り善がりや独断に陥ってはいけないということを知得するのである。また、人間は他人とのかかわりなしには生きることができず、それは自ら生きなければ自己として生きられないことを意味する。つまり、自己が自己の主体であるということは自己を支配し統御することである。さらに、他人の保護や干渉にとらわれずに、善悪の関わる物事などについて幾つかの選択肢の中から自分で最終的に決め、自ら積極的に自発的に正しいと信ずるところに従って行動することが重要である。つまり、自主とは、あらゆる行為において自分の力で決定することと捉える。且つ「正しさ」をもつためには、欲望や衝動や迷いを把握し、自分の内に自らの規律を作り、それにしたがって行動しようとする気持ちを捉えることが、自律の精神である。「自ら（自発性）」、「すすんで（積極性）」が必要であるとともに「自己を統御し規律を与える（自律性）」が真の意味での自主性であるとともに、真の意味における社会性であろう。

以上のことから、自主自律の精神を育むのとは、あらゆる行為において自分の力で決定し（判断し）、自分の内の自らの規律に従って、行動しようとする気持ちを育むことを捉える。

## 6. ねらい

あらゆる行為において自分の力で判断し自分の内の自らの規律に従って、誠実な責任ある行動をとろうとする心情を育てる。

## 7. 展開

学習過程	学習活動 (○発問、→予想される生徒の発言)	指導上の留意点
導入	1. ねらいを掴む。 ○ <u>自主自立とは</u> →規則を守る →自分で判断し行動する	・アンケートの結果から自分と他者の定義を比較させる。
展開	2. 資料を読む。 ○ <u>僕はなぜ次々に勝てる相手を探すのですか。</u> →勝って満足感に浸るため。 →自分に自信がないから。 ○ <u>「ありがとうございました」と比べ、「心から負けました」にしかない気持ちとはどんなものですか。</u> ・「心から『負けました。』」という敏和の言葉に着目させる。 →物事に真面目に取り組んでいる態度。	・「投了」の意味を確認する。 それ以上やっても自

	<p>→負けを認めることのつらさを乗り越えている自覚。</p> <p>→負けを認め、自分にも相手にも向き合うことが大切だと思っている姿勢。</p> <p>→相手を思い感謝する心を持っている（「ここから」に着目させる）。</p> <p>→自分に自信や誇りのある態度をもっている（「大人なんだ。」に着目させる）。</p> <p>◎<b>敏和にはあって、僕にないものとは何ですか。</b></p> <p>→自信、自律、理性、自制、誠実</p> <p>○<b>「笑えなかった」僕はどんな心境ですか。</b></p> <p>→敏和たちを見て、今までの自分を顧み自分の未熟さに気付き落ち込み呆然としている。</p> <p>→敏和の真面目で誇り高い毅然とした態度が輝かしく見えている。</p>	<p>分が負けになることを認めて勝負が終わること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基本概念と概念の間にある関係やつながりに対して考えさせる。</li> <li>・学んだことと、すでに知っていることの間にある関係やつながりについて考えさせる。</li> <li>・簡潔な言葉で表現させ、説明させる。</li> </ul>
終末	<p>3. まとめ</p> <p>○<b>私たち 68 期生は入学してから友や先生との交流のなかで「自主自律」を確立してきました。今後も継続していくために、あなたにとって最も必要なものは何だと思いますか。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の自分の展望について考えさせる。</li> </ul>

### 8. 本時の評価文

生徒のワークシートの言葉を紡ぐことで作成した。評価者が語感から新たな言葉を作り出すのではなく、ワークシートにある生徒から出たそのままの言葉をできるだけ取り出し、生徒個々を肯定的に捉えた評価文作成を心掛けた。評価文を作る中で、生徒が簡潔にまとめた場合に評価しがたい場面があった。生徒は短い言葉に思いを込めたのであろうが、評価者としては「評価するため」にその言葉から独自の視点で文を作成しそうになることがたびたび頭を悩ませた。そのため授業において、生徒の深い「思考の練り上げ」と自分の思いを「書き記す十分な時間確保」が必要であると感じた。且つ、評価には生徒の意見の理由や根拠、ときは背景までも書かせることが有効なのではないかと考えた。そこで、本時で用いた「思考の過程」を用いた発問は、生徒がどのような「知識」と「知識」、「知識」と「経験・体験」を結び付けて考えた授業者がとらえることができた点ではたいへん有効であった。ただ、それは評価文を作成するための授業者の工夫であってはならず、授業のねらいを深めるためのものではなくてはならないことは当然である。また、この評価文を受け取った生徒の立場に立てば、評価文の長さを一定にすることも配慮した。

### 9. 本時の評価文

定期的に自分自身としっかり向き合い、今 考えていることや感じていることを認めることが大事であると気づきました。

自分の苦手なことを見つめながら、自分や他人と向き合う心の強さが大切であると気づきました。

自分の良いところを発揮し、苦手なところを認め・改善する前向きさが大切だということに気づきました。

自分にとって嫌で恥ずかしいことでも認めることのできる勇気が大切だということに気付きました。
自尊心をもったうえで、自分に足りないものを深く探り、今後の自分の在り方を問うことが大切だと気付きました。
自分を振り返ることで、誤りを誤りで終わらせないことが自分の成長のためであると気付きました。
気を緩めずに自分自身を律し続け、今できることを頑張り続けることが大切だと気付きました。
自分の振る舞いとは、経験から学んだ責任・信念・憧れ・自我から生まれるものだと考えました。
自分を見つめ、自分と素直に向き合うことが大切だと気付きました。
自分の意志をもち、その実現に努力するとともに、自分のまわりの人々から学ぼうとする姿勢が大切だと気付きました。
自分の状況を把握し、すべきこと・できることを考えて行動することが大切だと気付きました。
常に相手に対する敬意と感謝を持ち、それを表現することが大切だと気付きました。
自主自律には、互いに認め合うことが大切だということに気付きました。
相手と向き合い尊敬の念をもちつつ、心のよりどころも必要だと考えました。
常に相手への敬意をもちつつ、自分自身と向き合う覚悟が必要だと考えました。
自分の実力を知り、自分にそれを認め、さらに前に進む心をもって他者からも吸収することが大切であると気付きました。
相手に対して敬意をもち、自らも前に進むため努力と勇気をもつことが大切だと気付きました。
相手への敬意や自分の興味への努力が身についたものになることが大切だと考えました。
自分を客観視することで自分を知り、さらに向上心が大切だと考えました。
自分と向き合い、自分の向上には何が必要かを問い続けることが大切だと考えました。
常に自分に対して厳しく、相手に対して謙虚であることが大切であると気付きました。
ものごとに対して多面的にみる視点を自分の中にもっておくことが大切と考えました。
自分の行いを見直し、認め、それが自分の良い経験になると考えました。
強い意志が自分を動かし、辛いことでも乗り越えていけると考えました。
勇気と敬意をもち、自分だけでなく相手も成長していけることを考えることが大切であると考えました。
相手を大切に、伝え合い、迷惑を掛けないよう行動することが自分を律することになると考えた。
自分と向き合い認める心をもちつつ、相手のことが考えられることが大切だと気付きました。
どんな自分でも認識できる強さをもち、どのような人になりたいのかについて考えることが大切だと考えました。
今の自分にできないこと、自分の弱さを認めて成長していこうと思える気持ちが必要だと考えました。
自分が無二の存在であることを認め、自分の不可能性を認めるだけの寛大な心が大切だと考えました。
自分のことを振り返り、相手に敬意をもち且つ見る姿勢が大切だと考えました。
自分の言動の失敗や過失を受け止め、活かしていくことを忘れないことが大切だと考えました。
自主自律とは自分のことであるからこそ、それを支えたり支えられたりする友人も大切だと考えました。
自分のことも他人のことも考えておく余裕がみんなを幸せにすると考えました。

自分を振り返るには、自分を認める勇気（強さ）や相手に対する敬意が大切だと考えました。
謙虚な気持ち、失敗を受け入れる心の余裕とさらに活かそうとする前向きな気持ちが大切だと考えました。
自分を認め、そこから努力するには自分が尊敬できる先生や仲間が必要だと考えました。
自主自律とは自分との戦いであるが、相手の行動もみて成長していこうという気持ちが大切だと考えました。
さらに次へ進もうという気持ちと、自分を理解し他人の秀でた意見を聞くことが大切だと考えました。
執着と素直さを持ち、自分のことを考えながら、まわりのこともよく見ることが大切だと考えました。

## 10 おわりに ～反省と課題～

生徒のワークシートの言葉を紡ぐことで作成した。評価者が語感から新たな言葉を作り出すのではなく、ワークシートにある生徒から出たそのままの言葉をできるだけ取り出し、生徒個々を肯定的に捉えた評価文作成を心掛けた。評価文を作る中で、生徒が簡潔にまとめた場合に評価しがたい場面があった。生徒は短い言葉に思いを込めたのであろうが、評価者としては「評価するため」にその言葉から独自の視点で文を作成しそうになることがたびたび頭を悩ませた。そのため授業において、生徒の深い「思考の練り上げ」と自分の思いを「書き記す十分な時間確保」が必要であると感じた。且つ、評価には生徒の意見の理由や根拠、ときは背景までも書かせることが有効なのではないかと考えた。そこで、本時で用いた「思考の過程」を用いた発問は、生徒がどのような「知識」と「知識」、「知識」と「経験・体験」を結び付けて考えた授業者がとらえることができた点ではたいへん有効であった。ただ、それは評価文を作成するための授業者の工夫であってはならず、授業のねらいを深めるためのものではなくてはならないことは当然である。また、この評価文を受け取った生徒の立場に立てば、評価文の長さを一定にすることにも配慮した。

### 参考文献

- 高野由香『自主自律の精神を育む道徳の授業展開－ICEモデルを取り入れた評価を通して－』  
土持ゲーリー法一『「主体的学び」につなげる評価と学習方法－カナダで実践されるICEモデル－』  
東信堂
- 服部敬一『「道徳の時間」における「ねらい」の検討』大阪教育大学紀要第IV部門第45巻  
服部敬一『道徳的価値の自覚を深める際の、子どもの情意面の考察』大阪教育大学道徳教育学論集第12号
- 福岡敏行『コンセプトマップ活用ガイド』東洋出版  
村上敏治『道徳教育の構造』明治図書
- 『これからの時代に求められる「国語力」についての構造』文化審議会答申  
『いじめの問題等への対応について（第一次提言）』教育再生実行会議  
『今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～』道徳教育の充実に関する懇談会  
『道徳に係る教育課程の改善等について（答申）』中央教育審議会  
『中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』文部科学省